



#37

AWAKE IN THE DARK

著: 藍澤たすく

イラスト: かもめ遊羽

「ふわああ〜」

通学路を歩きながら、学生服姿の大塚一葉は大あくびをしつつボリボリと頭を掻いた。昨日夜遅くまでゲームをやっていたため、完璧に寝不足なのだ。周りには同じ高校に向かう生徒の群れがそろそろと続いている。いつもの平和な朝の光景だ。

「ん？」

一葉はふと、手にしていたスマホの上部に見慣れないアイコンが点滅していることに気がついた。

「なんだこれ？」

何気なくそのアイコンをクリックする。

【寝言は寝て言え！ 俺が聴いてやるぜ！】

画面に表示されたオープニングメッセージを見て、一葉はようやく思い出した。それは先週ぐらいにインストールした寝言録音アプリだった。

面白そうだな……と思っ入れて設定してみたものの、そのあとはすっかりその存在を忘れていたというわけだ。

しかしアプリの方は律儀に仕事をしていてくれたようで、フォルダにはいくつかの音声ファイルが並んでいる。

「へえ〜、俺、寝言とか言ってるのかなー……」

一葉は興味津々の様子で再生ボタンを押した。

その瞬間。

『腕が……右腕が……疼きやがる……くっ、鎮まれ、俺の右腕……！』

「ぶーっ!?」

イヤホンから聴こえてきたあまりに中二な自分の寝言に、一葉は思わず噴き出してしまった。え？ なに？ 俺、寝言でこんなこと言っちゃってるの？

確かに俺、こっち系の漫画とかアニメとか結構好きだけど、さすがに自分で言うのはないわーどん引きだわー……。

洗面になった一葉が再生終了のボタンを押そうとしたその時。

『……覚醒めの時が近いのかもしれないわね……』

「えっ!?」

突然俺の寝言に応える女の声があった。

大人の女性の、ちよっとハスキーがかった甘い声だ……っていうか、誰!?

『ああ……そうだな……俺が、俺でいられる時間も……もうわずかしかないのかもしれないな』

い……もしそうだった時は……ソニア……」

『ええ、判っているわ。……あなたが人間である間に、私がちゃんと殺してあげる』

『ふふふ……相変わらず言いくいことをはつきり言うやつだな……だが、今はそれがありがたい……』

なに？ なに？ なに、この展開!?

一葉はスマホから伸びるイヤホンのケーブルをぎゅつと握って固唾を飲んだ。

『まだ昼間の人格の方には気づかれていないわね？』

『ああ、大丈夫だ。そこには細心の注意を払っている』

『そうね。気づかれたらこの素体ごと破棄しないとイケなくなるものね』

え？ 昼間の人格ってなに？ もしかして俺のこと？

それで素体ってなによ？ 破棄ってなによ？

あまりの展開に一葉は混乱し始める。

一体何が起こってるっていうんだ……。

『いっちゃん、おはようー!』

『ぶっ!』

一葉の背中に、突然セーラー服の女子がぶつかってきた。

そしてそのまま彼女は一葉を背中から抱きしめる。

「お、なにになに？ いっちゃん、何聴いてるの?」

「ちよっ……離れろよ、友梨香!」

一葉に抱きついたまま、興味津々に彼のスマホを覗いているのは、誰あろう一葉の幼なじみである如月友梨香その人だった。

いつも底抜けに明るく元気で、脳みそがお花畑なんじゃないかと思ってしまうほどエネルギーギッシユな娘だ。

「ま、そういうところも嫌いじゃないけどな……」

「ん？ 何か言った?」

「な、なんでもない! とにかく離れろ、暑苦しい! ……それにさっきから当たってたんだよ!」

最後の一言を気づかれないように早口で言うと、一葉は友梨香を無理矢理自分から引きはがし、ようやく人心地ついた。

「だいたい前から気になってたけど、その『いっちゃん』ってなんだよ?」

「えー、一葉だからいっちゃんじゃない?」

「じゃん、じゃねーよ! 俺は一葉! 大塚一葉!」

「こまけえ〜こたあ〜いいんだよ〜」

友梨香は手をひらひらさせながら、ころころと鈴を転がすように笑った。……くっ、可愛い

じゃねーか！

「で、何聴いてるの？」

「な、なんでもねーよ！」

「あっ！ あつやしい！ なんかエロいの聴いてたんだ！ いっちゃんやらしい！ 超やらしい！」

「ちっ、ちげーよ！ そんなんじゃ……あっ!」

友梨香は素早い動きで一葉の片耳からイヤホンを引き抜くと、それを自分の耳に押し込んだ。タイムイング悪く、先ほどの寝言がまた頭からリピート再生され始めたところだった。

「……ちよつ、友梨香、何勝手に人のイヤホン使つてんだよ!」

「……」

「友梨香？」

突然うつむいて黙り込んでしまった友梨香に、一葉が訝しげに声をかける。

「……気づいたの？」

「えっ？」

イヤホンを片耳に入れたまま、友梨香がぼつりと呟いた。

「……どうして気づいてしまったの……？ 気づかなければ、あたし達ずっとこのままでいられたのに……ずっと仲良しの……幼なじみのままでいられたのに……!!」

友梨香の声が変容していた。

先ほどのまでの鈴を転がすようなソプラノは影を潜め、今はちよつとハスキーで低音な声質になっている。

そしてこの声に、一葉は聴き覚えがあった。

「ソニ、ア……?」

一葉は震える声で呼びかけた。

返事はない。

その代わりに友梨香の周りに禍々しいオーラが満ち始める。

友梨香の小さな体がいつもの何倍にも大きく感じられた。

この圧迫感、殺気……これは……や、殺られる!」

「なーんてね！ あたし上手いっしょ、千歳さんの物まね♪」

「へ？ 物まね?」

固く身を縮こませた一葉に、友梨香はいつものソプラノで陽気に話しかける。

「綾倉千歳さんだよ、ほら、いっちゃんが今聴いたラジオシアター【銀河の二人】のソニア役やってる声優さん！ あたし結構ファンなんだよ」

友梨香は腰の後ろに手を組むと、にっこりと満面の笑みを浮かべた。

つまり事のあらまはこうだった。

一葉はラジオ録音アプリも入れていて（しかもまた入れたことを忘れていて）、その録音データを寝言データと勘違いして聴いていたのだ。

そもそも一葉は迂闊^{うかつ}だった。

自分と同じ声スマホから流れてきた時点で気づくべきだったのだ。

自分が普段聴いている声と、他人が聴いている自分の声は違う……という単純な事実。

声を発した本人は、音声として空气中を伝わる音と同時に、骨を伝^{つた}う振動の音も合わせて聴いているため、一般的に他人が聴いている声より、自分が聴いている声は低く認識されている。録音した自分の声が変わりに聴こえるのはそのためだ。

つまり一葉が聴いていたのは、普段自分が聴いている声にそっくりな声優さんの演技だったというわけだ。

「なーんだ、びっくりしたぜ……」

一葉は心底ほっとした顔で、道路脇のベンチにへたりこんだ。

「びっくりしたのはこっちだよ。だっていっちゃん、いきなり真っ青な顔になるんだもん♪」

全然深刻な感じのしない陽気な調子で友梨香が続ける。

「でもいっちゃんの寝言って気になるな……ちよつと聴かせてよ！」

「や、やだよ！ 俺もまだ聴いてないし！ 変なこと喋^{しゃべ}ってたら恥ずかしいじゃん！」

「いっちゃん、いっちゃん、所詮寝言^{しょせん}なんだし！ 何言^{なに}ってでも大丈夫だよ！」

「あっ、こら!!」

止める間もなく、また友梨香はイヤホンを片方奪うと素早く自分の耳に押し込んだ。

「再生開始っ♪」

今度は間違いなく「negoto001.mp3」というファイル名をクリックする友梨香。

「……うむ……むにやむにや……好きだぜ、友梨香……愛してる……むにや……」

そして先ほど以上に衝撃的な内容の寝言に、一葉も友梨香も瞬時に真^まっ赤^かになってしまったのだった。

おしまい